

墨川亭雪麿『傾城三国志』翻刻（一）-初編上帙-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2016-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 神田, 正行 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/18086

墨川亭雪麿 『傾城三国志』 翻刻 (一) — 初編上帙 —

神田 正行

はじめに — 馬琴・雪麿と「女三国志」 —

『金毘羅船利生纜』(英泉画。文政七年〜天保二年、甘泉堂刊)において、中国小説『西遊記』の翻案を試みた曲亭馬琴は、同作に続けて『水滸伝』の翻案作『傾城水滸伝』(豊国・国安等画。文政八年〜天保六年、仙鶴堂刊)を刊行して、ひとかたならぬ評判を得た。これ以降、柳亭種彦の『修紫田舎源氏』(国貞画。文政十二年〜天保十三年、仙鶴堂刊)に代表される、続き物の長編合巻が盛行し、馬琴もまた『漢楚賽擬選軍談』(国芳画。文政十二年〜天保二年、永寿堂刊。以下適宜略称)や『新編金瓶梅』(国貞画。天保二年〜弘化四年、甘泉堂刊)など、白話小説に取材した複数の合巻を、並行して執筆することになる。

『西遊記』を手始めに、『水滸伝』『金瓶梅』と、いわゆる「四大奇書」のうち三作品までを翻案した馬琴であるが、残る『三国志演義』を、長編合巻の趣向源とすることはなかった。文政十二年刊行の『擬選軍談』初編の巻末には、以下のような広告文が掲げられているものの、この作品も企画のみに終わっている。

擬太平記演義三國志 初編

曲亭馬琴作 全八巻 合本四冊

袋入上本 年々に梓をつきて数編の大部にいたるべし

この書も右の漢楚（稿者注、『擬選軍談』におなじ。唐山蜀漢・呉・魏のたゝかひを、『太平記』の世界にとりなして、一事も漏さず綴らんとなり。これも亦遠からず、つゞきて刊行せまほりす。よりにて且、その書名を掲出して、四方の御ひいき方に、報たてまつるになん。

南朝最良を自任する馬琴の作であつてみれば、おそらくは尊氏を曹操、正成を諸葛亮に擬する目算が立てられていたことであろう。『擬太平記演義三國志』（以下適宜略称）の刊行予告は、翌年（文政十三年。十二月に天保改元）刊行の馬琴合巻『代夜待白女辻占』（国貞画）巻末にも掲げられているが、種彦の作品に前後を挟まれたその配置が、馬琴の気分を損ねたものと思しく、彼は西村屋に「予が作名斗けづり取」ることを命じている。

天保二年に刊行された、『擬選軍談』第三編下帙の巻末には、『擬太平記』の近刊予告を見出すことができない。そして『擬選軍談』の刊行も、この第三編下帙をもって中断されたのである。

そもそも、馬琴が西村屋に対して『漢楚賽擬選軍談』を執筆し、さらに『擬太平記』の続刊をも約したのは、以下のごとき事情による。

一、拙作『傾城水滸伝』四編・五編、并ニ『女西行』（『今戸土産女西行』。国貞画、錦森堂刊）等之合巻、早春被成御覽候半と被存候。『（傾城）水滸伝』、弥流行、（中略）百五六十金も売利可有之など、申候。（中略）夫二付、外板元も、ことの羨しがり、いづれもつゞきもの、上本袋入二いたし度候二付、「女三國志」などいふやうなる物、ほり立申度よし、申ものも御座候。「女傾城」がうれ候とて、わがまねをみづからして、「女三國志」が書れ可申哉、御一笑可被下候。いづれにも、あまり骨折候ハ無益候間、何ぞ通俗ものか演義ものをとり直し、綴り

立遣し候つもりニ御座候。

（文政十一年正月十七日付殿村篠斎宛馬琴書翰別翰）

文政十三年正月二十八日付の、やはり篠斎に宛てた書状を参照すると、馬琴に「女三國志」の執筆を懇憑した「外板元」は永寿堂であり、馬琴がその対案として提示した、「通俗もの・演義もの」に基づく新作が、『漢楚賽』であったことを確認できる。そこで文政十一年の馬琴日記に徴すると、前掲書翰の染筆に先立つ正月十四日、西村屋与八が「年始祝義の為」に著作堂を訪問している。同日の日記からは、この折に兩人の間で交わされた会話の内容をうかがい知ることができないが、同月二十七日の日記に見える、以下のごとき記述を併せ考えると、まさに十四日の「年始祝義」に際して、「女三國志」の企画が話題に上ったのであろう。

一 昼前、西村与八来ル。家君御対面。当年、『傾城』水滸伝』大評判二付、何卒、統物御著述願度旨、早春被參候節、依被願、御趣向之事、得相談、其外、『殺生石』一件之事等、御示談後、歸去。

この日の日記は、息子の宗伯（興繼・琴嶺）が代筆しており、文中の「家君」とは馬琴のことである。『傾城水滸伝』の盛行を羨んだ与八は「早春被參候節」（おそらく十四日）に、自家でも馬琴の「統物」、すなわち長編合巻を刊行したい旨を願い入れ、同時に「女三國志」の企画を提示したのであろう。しかし、『傾城水滸伝』の作者たる馬琴にとって、「女三國志」のごとき安易な企ては、「我が真似を自ら」するに等しく、決して受け入れられるものではなかった。そこで彼は、二十七日に改めて、「何ぞ通俗ものか演義ものをとり直し、綴り立遣し候つもり」という「御趣向之事」を、与八へ説明したものと思われる。

両者協議の末に刊行の決まった『擬選軍談』は、『通俗漢楚軍談』（『西漢演義』の翻訳。章峯・徹庵訳。元禄八年刊）に描かれた項羽と劉邦の抗争を、我が国の木曾義仲と源頼朝との身上に移して翻案した合巻である。馬琴としては、より分量の少ない『漢楚軍談』の翻案作を先行して執筆し、その評判を見計らった上で、改めて『三國演義』の翻案に取

り組む胸だくみだったのであろう。

『漢楚賽擬選軍談』には、『傾城水滸伝』のごとき「男女逆転」の趣向が用いられておらず、これは本朝の婦女子が、唐土の「演義もの（講史小説）」の筋立てを演じることに、少なからぬ無理や不自然が予想されたためであろう。『水滸伝』の物語が、世話もの的な色彩を強く帯びているのに対して、『漢楚軍談』は純然たる歴史小説であり、馬琴は両作の差異を正しく見極めて、自身の『擬選軍談』を「女漢楚」にはしなかったと考えられる。その結果、『擬選軍談』の画面は鎧武者ばかりで色気に乏しいものとなったが、同作の題号にも謳われた和漢にまたがる「擬選」は、馬琴にとっても会心の趣向であったに違いない。しかるに、板元西村屋の経営が、大火等の災厄によって傾いたため、『擬選軍談』の刊行は第三編をもって杜絶する。これに伴い、続作として予定されていた『擬太平記演義三国志』も、未執筆・未刊に終わったのである。

○

おそらくは、馬琴も与八も認識していなかったと思われるが、両人が新たな「続き物」について協議する以前、合巻『女三国志』の刊行は、すでに他の書肆によって広告されていた。すなわち、本稿で紹介する、墨川亭雪麿の『傾城三国志』（国貞画。文政十三年〜天保五年、喜鶴堂刊）である。佐野屋喜兵衛が文政十一年正月に刊行した、雪麿作合巻『入船帳忠義之湊』（六巻二冊。英泉画）巻末の「文政十一子春新鑄目錄」に、「傾城三国志 全十冊（この「冊」は「巻」の意。一卷は五丁） 墨川亭雪麿作 溪斎英泉画」の近刊予告が掲出されている。

同じ年の十一月、作者の雪麿は画工英泉の紹介で、馬琴との初対面を果たしている。以後も雪麿は、「榭原殿（越後高田藩）内、田中源治事、雪丸」として、幾度か馬琴日記にも登場するものの、両者の間で『傾城三国志』が話題に上

る機会はなかった模様である。

件の刊行予告から二年ののち、『傾城三国志』の初編は、挿画画工を国貞に変更して、四冊四十丁の分量で発兌された。先にも言及した、文政十三年正月二十八日付の殿村篠斎に宛てた馬琴書翰の中に、以下のような記述が見える。

（前略。西村屋の「女三国志」企画のことなどあり）今春の新版に、「女の三国志」出候よし、貴翰にて承知。さて、世上ニハ才子もあるものかな。「女の三国志」など、いかに心力をつひやし候とも、愚老などハ、つゞ

り得がたく思ひ候ひしに、たやすくつゞりなし候ハ、作者何人にや、ちと見たくなり申候事ニ御座候。

つまり馬琴は「女の三国志」、すなわち『傾城三国志』の作者が雪麿であることはもとより、喜鶴堂による同作刊行の企てすら、この時点まで聞き及んではいなかったのである。

同書に興味を覚えた馬琴は、早速この合巻を取り寄せて披閲したが、雪麿の作りさまは馬琴の意に適うものではなかった。文政十三年二月六日付の篠斎宛馬琴書翰における同作への言及は、「先便被仰下候、雪丸作『傾城三国志』も、とりよせ披閲、一冊見候へバ、もはやわかり候間、そのまゝ小兒ニとらせ申候」の一文のみに過ぎない。『三国志演義』の筋立てを、本朝の婦女子が演じる不自然は、かつて自身が回避したものであり、旧知の雪麿がその愚を犯していることに、馬琴は深く落胆したのであろう。

○

以下本稿では、雪麿の『傾城三国志』全四編（未完）を翻刻していくが、誌面の都合もあり、各編を二回に分けて紹介する予定である。現在稿者が「江戸風雅」誌上で翻刻している、馬琴の『傾城水滸伝』³とは異なり、本作では各画面に「言葉書き」（人物の台詞。漫画の吹き出しに相当）が添えられていないため、本稿では見開き一丁を単位とせず、

改丁の位置を示すだけで、本文を連続して掲出することとした。その他の凡例は、基本的に右拙稿と同様である（後掲参照）。

『傾城三国志』初編上帙の物語は、原作『通俗三国志』（湖南文山（章峯）訳。元禄四年刊）巻一の「祭天地桃園結義」から、続く「劉玄德破黄巾賊」の中盤にまで及ぶ。今回の翻刻に際して、特に稿者の注意を引いたのは、第十八丁の彫刻が、他に比して明らかに拙劣な点である。特に裏面には、脱文や不自然な空白があり、画面に描かれた二人の人物にも、名前を示す名印なしるしが添えられていない（後掲参照）。彫刻後に不測の事態が出来たものと思われるが、あるいは『傾城水滸伝』第九編の板木も一部焼失した、文政十三年正月十九日における小伝馬町の火災ゆえに、刊刻間もない本作にも、何らかの支障が生じたのかも知れない。

《注》

- (1) 文政十二年十月六日日記。この一件に関しては、佐藤悟氏「馬琴の潤筆料と板元——合巻と読本——」（近世文芸59。平成6年）にも言及がある。
- (2) 作者雪麿については、佐藤至子氏「墨川亭雪麿と戯作」、ならびに「墨川亭雪麿活動年譜稿」（いずれも『江戸の絵入小説——合巻の世界——』所収。平成13年、ペリかん社）に詳しい。
- (3) 「曲亭馬琴『傾城水滸伝』第三編 翻刻と影印」（江戸風雅4。平成23年）以下、同誌に連載。同作の初編・第二編は、林美一氏により翻刻刊行されている（江戸戯作文庫。昭和59・61年、河出書房新社）。

凡例

- 一、仮名は一部を除いて、現行のひらがなに統一した。また、会話を示す「」や、句読・濁点などを適宜補った。
- 一、読み誤りのない範囲で漢字を宛てた。その際、もとの表記を傍訓で残したものもある。また、原本における振り仮名は、一部を除き省略した。
- 一、原本との対照を容易にするため、合印^{あひしるし}（文章を読む順序を示した記号）をも翻刻するが、多くは形の近い記号で代用した。
- 一、本文には、内容にもとづいて適宜段落を設けた。また、「巻（五丁の単位）」ごとに改段を行った。
- 一、見開きが改まる位置には、「（4ウ・5オ）」の形で丁数を示した。
- 一、各人物が初めて、もしくは久々に登場する場面では、原作『通俗三国志』の相当する人物を【】内に注記した。また一部の地名や事物についても、同様の処置を行なった。「▼」印以下は、稿者による注記である。
- 一、影印ならびに翻刻の底本は、名古屋市立鶴舞中央図書館蔵本である。該本は合綴本であるが、摺りの状態などから早印本と考えられる。前表紙見返しや出板目録など、鶴舞本に欠ける部分は他本から補い、初印本の形態を再現することに努めた。

《第一冊 表紙》



※国会図書館蔵本による

庚寅新刊 喜鶴堂梓

傾城三国志 初編

雪麿作 国貞画

上帙巻之上

曹操 ▼ 駒絵内。中央は滝夜叉

▼地模様では、三本線と「国」「シ」が図案化されている。

《第一冊 前表紙見返し》



雪麿作 / 国貞画

彼書三国好男児 此册三家美女子

一様春風吹樹枝 万花同実看真理

上帙上巻

庚寅春発市 / 喜鶴堂印行

《二丁表 自序》



(巻)

土佐節に傾城三国志あり、義太夫節に本朝三国志あり。書肆喜鶴堂予に請て、「頗 彼書に似肖き、長物語を編よ」と云。「警家が豆熬いりやせまいし、あられも無くと被命ませ。山手育の養天鸞、ホウ本文も片言許、根からつまらぬ仇口や、並 本なら作りもしやう、もふ何事もお赦なされ」、と辞すれば主人筋張て、「否々辞退が枕酒屋。お三輪が文句も旧故にたり。腹に案は無とても、

責では書名を掲出して、遠からず新著の旨を、奥目録につけてまつ、其白圈を塞ん」と、切に乞れて止難く、「陳文漢土の陳寿が撰し、那三国志を台として、羅貫が演義も混雑つ、吾邦醍醐の朝に摸擬、延喜杯はどでこんす。」「這のはゑらひしこゑらひ」と、と 披露に及しは、はや去々歳の子春から、今茲で丁度福徳の、三年めで度発市し、諸君高評を給ひなば、書肆が歡喜甚く、自今已后年々に、嗣編めと云よしを、則 序文に換と云。

文政十三庚寅春正月刊行

墨川亭雪麿識

《注》

- 土佐節の傾城三国志↓宝永五年序『通俗傾城三国志』。
- 本朝三国志↓近松の作で、享保四年初演。
- あられも無こと↓以下の言葉は、浄瑠璃『妹背山婦女庭訓』第四における、お三輪の言葉を踏まえる。
- 羅貫↓『三国演義』や『水滸伝』の作者とされる羅貫中。この呼称は、馬琴の誤りを踏襲したもの。
- 延喜杯↓「延喜」に「演義」を効かせる。

《一丁裏・二丁表》



桑邑の玄妙
【劉備】

▼駒絵「玄德」。玄妙は原作の玄德に倣い、草鞋を編む。

賊婦芒角
【張角】

玄妙いもと関路
【関羽】

▼駒絵「関羽」。関路は関羽同様に青龍偃月刀を帯する。

芒角妹 梁
【張梁】



将門妹 滝夜刃姫 【曹操】 ▼ 駒絵「曹操」。
 長野荘司 【劉焉】

玄妙いもと飛鳥 【張飛】

▼ 駒絵「張飛」。看板には「ぼたんもみち」とあり、
 飛鳥は猪をさばく。原作の張飛が肉屋であること
 の反映。

短瀬武東太 ▼ 娘の蒲生が鄒靖に相当

《三丁裏・四丁表》

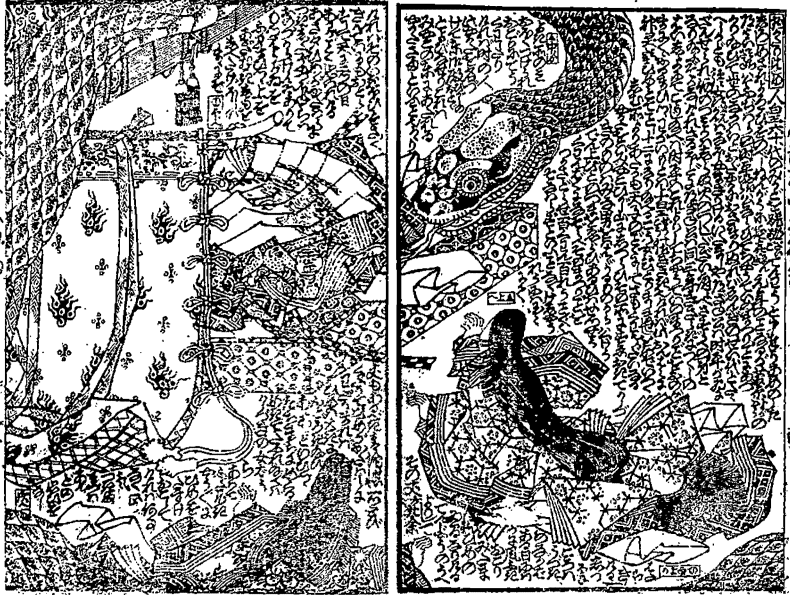


つのだいもしつぽう
芒角妹 七宝【張宝】
はちすね つねね
董根の局【董卓】

▼駒絵「董卓」

くんじのりかけ
郡司教景【龔景】
ひがしのおとこみ たまひめ
東御殿神靈姫【靈帝】

▼駒絵の「孫堅」は、純友の母堅田に相当。



（4ウ・5オ 東御殿に靈蛇出現）

物語ははじめ人皇六十代の帝、醍醐天皇と申し奉り、天の下しろしめされ、喜びを延べし年号に、延喜元年のことなるが、菅原の道真公、藤原の時平公、並びて朝廷の政に預かり給ひて、世の中は、いと穏やかに治まりぬれば、延喜の聖代と讃へしかども、讒姦はなほやまざりける。傷ましや道真公は、時平が為に讒せられ、何の罪かは知らぬ火の、筑紫太宰府へさそらへの、身となり給ふぞ悲しけれ。さる程に道真公は、同三年如月に、筑紫の配所にて薨じ給へば、時平はこれよりして、朝廷の政を、おのがまに振る舞ひつゝ、我が妹は上皇の、御后也ければ、此御腹に神靈姫【後漢靈帝】とて、今年十二になり給へる、皇女ひとりまませしを、愛で慈しむ所より、あたかも天子のごとくにして、さも広大なる館をば、都東山にしつらひ、その所にすま置きて、傳きの者は、みな男をはむかるものから、公卿殿上人の妻を選び、あるひは摂政関白に擬へ、その政を掌らせ、百官百僚ことごとく、備はらずといふことなく、化粧料には国々にて、▲上へ▲中よりよき所のみ多く付けら



(5ウ) 玉柳と旧池

れ、奢りに超過したりければ、時の人、此館を名付けて、東御殿と呼びなせり。これは都の東に当たれる、館さまといふこと也。かゝりければその勢ひ、をさく禁庭にも劣らずして、天に二つの日、あるが如く思はれける。朝夕姫が側に、付き従ふ局らは、おのづから権威ありて、専ら我意を振る舞ひつゝ、上を欺き下をしへたげ、ほしいまゝにぞ○印へ△印より働きける。

しかるに頃は卯月の半ば、ある日にはかに風吹き起こ

り、神靈姫の居間なりける、天井の上よりして、その丈廿余丈もあるべき、青蛇一つ飛び下りて、姫が側にわたかまれば、姫は大きに驚き給ひ、「あ、あ」と言ひつゝ、たちまちに、目くるめきて倒れ給へば、傳きの女房ら、慌てふためき、やう／＼に、姫を助け起こしてければ、何事なく正気つきぬ。まづは安堵の思ひをなし、次へ(4ウ・5オ)／＼続き遠侍を召し寄せて、かの青蛇を、取り除かんとしたる内に、いかにかしけん、たちまち青蛇の形は消えて、いづち行きけん跡形なし。かくてもいよ／＼風吹き荒れて、雷おどろ／＼しく、鳴りはためきて坤軸も、砕くるばかりのありさまにて、都の内なる民の家、千軒余りこと／＼、風雨のために崩されて、死する者限りなし。夜半に至りてやうやくに、雨風も静まりければ、人の心もおちゐたれど、これより後、怪しび多く重なる上に、陰謀を、企つる者ありと聞えぬ。○下へ○上よりこれこそ国家の大事よとて、姫君補佐の女房たちを、多く召し寄せ「榻を、除くべき手立てやある、いかゞせんず」とありけるに、その時座席を進み出づるは、

大内記三〇〇【▼字形不明確】のまさひらが妻玉柳【楊賜】、藤原のはるみが妻旧池【蔡簷】と、いへる二人の女官らが、言葉等しく言ひけるは、「近ごろ続きて怪異の事、多く起りて折々に、謀反の企てありといふ、聞こえあるはこれ正しく、館滅ぶるといふ知らせか。されども天なほ、我が君を捨て給はぬにや、禍を見せて、我々を戒め給へり。その禍のもとを言へば、今姫君のおん側近く、仕へ申す近習の女房、そゞろに権威を振るひつゝ、おのれに媚びる者を取り上げ、諂はざるを罪に落として、遂に国家の二の巻へ

(5ウ)

(二)

一の巻より禍を、醸するからにかの輩を、除き去り給ひなば、禍おのれと消えぬべし」と、秘かに申上しかども、たちまちこの事漏れ聞えて、玉柳・旧池兩人ともに、かの近習の女房らに、殺されんとしてけるを、人々旧池らが才を惜しみ、命乞ひして助けしとぞ。時の勢ひとは▲上

さてその後、に勢ひ激しき、かの近習の女房らに、讓葉

【張讓】、走井【趙忠】、封皮【封諤】、段珪【段珪】、節竹【曹節】、金欄【候覽】、石橋【塞頰】、晚稻【程曠】、夏箕【夏輝】、毛衣【郭勝】といへる者、その數十人ありけるが、勢ひ盛んなるをもて、人これを、十婦人【十常侍】と称へつゝ、敬ひ重んぜざる者なく、役にあるともがらば、皆おもねり諂ひぬ。

その明くる春は延喜四年、甲子の年也けるが、こゝに又伊勢の国、鈴鹿郡 鈴鹿山に、芒角【張角】といふ女あり。父母はやく身まかり、二人の妹ありけるが、一人を梁【張梁】、その次を、七宝【張宝】と呼びなして、姉

妹三人みな次へ(6才)／＼続き共に、世の常ならず賢しかりき。ある時芒角山に入りて、片栗の根を掘りてゐたりしが、しばし憩はんとてかたはらなる、岩がねに腰うちかけて、休らひしその折から、いづくよりか来たりけん、たちまち一人の老仙ありて、向かひのかたにたゞすみぬ。そのありさまをつらく見れば、眼の内縁にして、顔ばせは、五ツか六ツの童に似たり。手には藜の杖をつき、芒角を呼びかけて言ふやう、「やよ女よく聞ね。そも



(6才) 芒角三姉妹

く我は此山に、年久しく住まひぬる、南斗仙人【南華老仙】といふ者にて、こゝに不思議の神書を持てり。誰にもあれ、此書の旨を、明らめさせしその上にて、よく道を行はしめ、善を施さしめんと思へど、いまだその人を得ず。今おことが様子を見るに、眼ざしたゞ者ならば、此書を授けて我が道を、行はしめんと思ふはいかに。汝これらの事を聞分き、我が道を守らんや」と、言はれて芒角一度は、疑ひ惑ふ心ありしが、たちまち胸の内に思案を極め、まづ我が形を改めて、さて懇懃に言ひけるは、「つらく御身のありさまを、見奉ればかしこくも、神の如くに思はれぬ。賤しき妾を、大仙人の見所ありとて、その神書の、旨を明らめさせし後、道を行ひ、善を施さしめんと、おぼし給ふはありがたきまで、辱は身に余れり。身に○上へ／＼○下より応じたる事しあらば、いかでか違背し侍らんや」と、頭を下げてかしこまれば、南斗仙人につことうち笑み、「おことが心さもあらば、いざとく神書を授けんず。こは『太平要術』と名付けて、又ありがたき稀代の書也。おこと此書を熟覽し、

（6ウ・7オ 芒角、仙人と出会う）



常に道を行ふて、専ら善を施しつゝ、天に代はりて人の世を、あまねく救はんことを思へ。もし悪心を起こしなば、必ずしも身を滅ぼすべきぞ」と、言ひつゝ、一巻の書を取り出で、芒角に授けにければ、芒角はおし戴き、再拜啓首したりける。かゝる所に一陣の、風さつと吹き起り、かの老仙は何処へか、行き方知らず飛び去りけり。かゝりし程に芒角は、件の神書を得てしより、夜昼さらには怠らず、かの書に眼をさらしければ、その旨を早く

次へ（6ウ・7オ）／**続き**悟りて、遂に雨を呼ぶの術、風を招くの法を得たり。しかるにその頃世上一統に、時の氣の病流行して、死する者多かりければ、芒角は我が姿を、太麻の覗女にいでたちつ、「寄せ弦・口寄せの上手にて、神道に通達し、難病奇疾、物の怪の祟りなんどもそのもとを、明らむること鏡にものゝ、影を映せる如く也」と言はせつゝ、あまねく符水を施すに、験あらずといふことなく、世の人芒角がもとに來たりて、祈禱を乞ひまじなひを頼み、その身の科を懺悔して、奇特あらんことを願ふに、みなその験を現はして、病はずなは



(7ウ・8才 術を施す芒角)

ちたちどころに、平復せずといふことなし。かゝりければ芒角は、男女の教え子あまたつきて、蟻の蜜に寄るがごとく、三千六百人に及び、師匠を敬ひ傳く事、君と臣とのごとく也。

芒角はこれよりして、心に非分の望みを起こし、謀反の企てしきりにして、あまたの教え子を四方に分かち、病を救はしむると称へて、大方・小方と名付けつゝ、およそ三十六の方を立て、その一部ごとに隊長を置き、一百人の、者どもをして率ひしめ、ことにその隊長には、將軍の名を蒙らしめたり。「黃天太平三月甲子」と、いふことを言ひはやらせ、甲子の二字を符に書きて、世にあまねく施し与へ、村里町々宮寺まで、ことごとく此神符を、押さずといふ所もなく、敬ひ尊ぶありさまは、鬼神を礼拝するに異ならず。

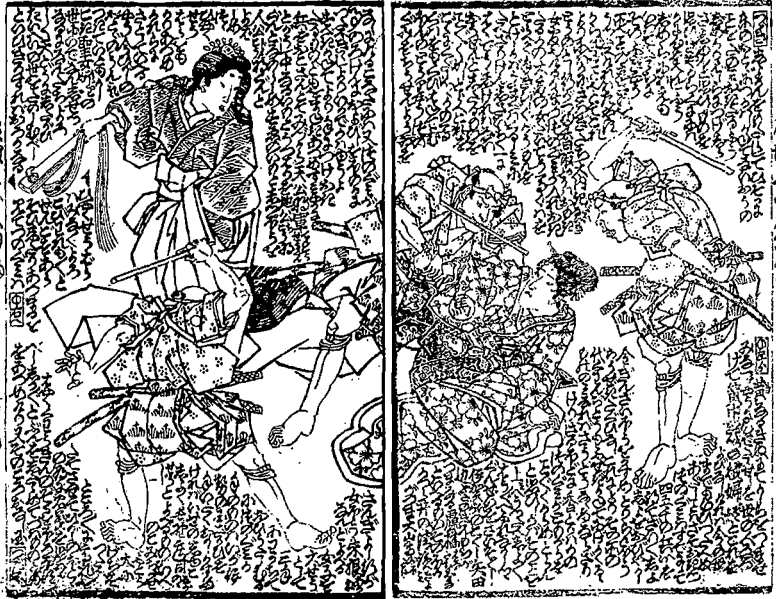
かくて後芒角は、大方の女隊長、馬杞【馬元義】といふ者に、金銀を多くもたらし、東の御殿に遣はして、秘かに十婦人に賂ひして、その心を結ばしめ、封皮・段橋二人の局に、内応のことを頼みしに、かの封皮・段橋ら

も、贈りもの、金銀の、多なるに目をくれて、快くうけがひけり。

芒角は又「二人の妹、梁・七宝にも今こそは、心の機密を言ひ聞かせ、荷担させばや」と思ひしかば、二人を側へ招き寄せ、声を潜めて言ひけるは、「世に至つて得がたきものは、只人の心にこそ。×/×今幸ひに、人の心我が身に帰して、我が身をば、人みな父母の如くに思へり。されば我が身が何事まれ、下知するを人ごとに、否まんやうはあらずかし。かゝれば此時の勢ひに、乗じて東の御殿の富貴を、奪ひ取らんはいと易し。もし猶予せばたちまちに、時を失ひて後悔あらん。願ふはおことら二人の本意を、ありのまゝに聞かまほし。とく／＼告げよ、いかにぞや」と、言葉せわしく問ひかくれば、その時梁・七宝も、うちほう笑みて小膝を進め、言葉等しく言ひけるは、「いかにも姉さまの宣ふ如く、我々二人が心にも、もとより望む所ぞかし」と、喜ばしげに言承けすれば、芒角大きに喜び勇み、「さは」とて戦の用意をしつゝ、みな一様に黄なる旗を、いく本となく作り立

て、三月五日をもつて、事を起こさんと図りしかば、唐山【唐州】といふ女子に、おのれが次へ（7ウ・8オ）／＼続き書簡をもたらし、秘かに東の御殿に遣はし、かねて内応の事を頼み置きたる、封皮・段橋らに告げ知らさしめんと、思ひしものを思ひきや、唐山にはか心に愛し、封皮らにはえも言はで、直ちにその奉行所へ、事の子細を訴へければ、「たやすからざる事也」とて、これよりにはかに騒ぎたち、大内記、藤のとし行が妻香取【何進】は、重き女官也けるが、まづ芒角が入れ置きたる、かの大方の女隊長、馬枳を捕らへて手厳しく、拷問を遂げしかば、馬枳苦しみに耐へざりけん、子細逐一に白状しければ、内応せんとしたる者を、悉く召し捕らへ、これを獄に下しつゝ、かの馬枳をも首刎ねて、謀反の頭領芒角を、誅せん用意をなしにける。

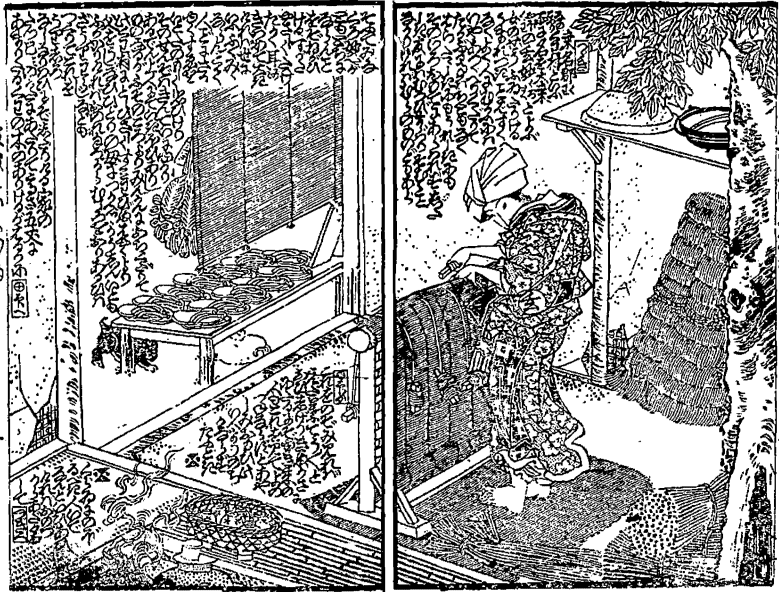
こなたには又芒角が、事の露頭に及びしを、仄かに伝へ聞きより、いかでかは猶予すべき、「かねてより手につけおきたる、者どもを招き集め、速やかに兵を起こさん」とて、自ら天公將軍と号し、中なる妹梁を、地公



(8ウ・9オ 香取、馬把を捕らえる)

將軍と名乗らしめ、末の妹七宝を、人公將軍と呼ばしめつ、百姓ばらをもかり集め、彼らに論して言へるやう、「今東の御殿の運氣尽きて、いともかしこき聖女の、世に出でなん時節なるに、汝たちよろしく天道に従ひ、太平の世を樂しむべし」と、言ひ聞かすれば愚かなる、百姓ばらはみなく喜び、我もくと前後を争ひ、来たり集まるを見て芒角は、○右へ／＼○左より黄なる緇にて頭を包ませ、みな一様にいでた、せしを、世の人名付けて黄巾の、賊婦とこれを呼びなしければ、今の世までも言ひ伝へぬ。

他事はさておきつ。芒角は既にして、四五千の兵を得て、在々所々を脅かし、金銀財宝をかすめ取り、乱暴狼籍類なし。これによりその所の、代官・地頭も防ぎかねて、逃げ隠るゝ者のみなれば、騒動斜めならざりけり。さる程に、香取はかの芒角が、ともがらをことごとく、搦め捕らんと思ひしかば、そのことを上へ訴へ、処々方々へ触れ流しつゝ、軍勢を催促し、伊賀の国司、矢田部のきんもちが妻なる、盧橘【盧植】といへる者、その他



（9ウ・10オ） 蕙を編む玄妙

かつら井の清覧が妻大嵩【皇甫嵩】、参議よし行が女房朱根【朱雋】など呼べる女子を大将として、三手に分ちて追ひ討たしむるに、芒角が手の者は、伊賀・伊勢の国境を、手痛く侵しかすめければ、伊勢の守護職、長野の庄司【劉焉】と呼べる者、家の子短瀬武東太【鄒靖の父】に下知を伝へ、所々に、高札を立てさせて、「東の御殿の為に忠義を思はず、早く黄巾の賊を滅ばすべし、云々」と文を認めて、兵どもを集めけり。

その頃同じ国次へ（8ウ・9オ）／続き桑名郡、桑村といふ所に、名を大桑の玄妙【劉備】と呼ぶ、女の丈夫るたりける。生まれつき、言葉少なく、よく人に向かふには、礼厚くへりくだりて、高ぶる事はちともなく、腹立しきにも嬉しきにも、その色面にあらはれず。親しき友には睦び交はり、背くことなかりければ、村の者ども争ふて、みな玄妙が友どちに、ならんことをぞ願ひける。姿優しく丈高く、耳きはめて大きければ、世にいふ福耳ならんとて、人ごとに栄ゆく末を、いと頼もしく思ひけり。その先祖は禁庭に、ゆかりある殿上人にて、勢ひあ

りし者なるが、父祖の頃より民間に、落ち下りて此桑村に、年久しく住みわびぬ。早くより父を失ひ、ひとりの母に仕へつゝ、孝心いとも深かりければ、おのれ手づから菘を織り、あるひは草履・草鞋なども、作りてこれを売りしるなし、生業にぞしたりける。家の辰巳の方に当たりて、高さ五丈に余りたる、桑の木もありけるが、はるかに○印へ／＼○印よりこれを望み見れば、枝葉重々と生ひ茂り、衣笠に似たるにぞ、行き来の人もこれを見て、



(10ウ) 玄妙を見とがめる飛鳥 ※国会本

世の常ならずと怪しみ思ひ、此家より後必ず、尊き／＼位に昇るべき、人出でなんと言ひあひければ、自づからあだ名して、次へ(9ウ・10オ)／＼続き大桑の玄妙とて、あたりに知らざる者もなし。

さる程に玄妙は、かの芒角のともがらが、鈴鹿山に起りければ、今専ら国々より、兵を招かんとて、こゝにも件の高札を、立たるをつら／＼眺め、しばし嘆息して我が宿へ、たち帰らんとする程に、後ろの方より声かけて、「こやなう姉御待ち給へ。御身はなぞて朝家の為に、助けとなるべき心もなく、只いたづらに嘆息して、空しく帰らんとし給ふぞ。見参らすれば姫御前なれども、をさ／＼丈夫に劣らざる、姿形に見えながら、言ふ甲斐なし」と嘲るを、玄妙は何者ぞと、後ろの方を振り返れば、年の頃は二十にもや、なるらんと見ゆる女子の、色黒くして目は丸く、頬骨立ちて頤とがり、さもむくつけき◆
◆姿也。玄妙は、まづその名を問はんと、「しか言ふおことが名は何と、呼ばれ給ふ」と問ひかくれば、件の女子は進み寄り、「妾は当所に住まひして、名をば飛鳥

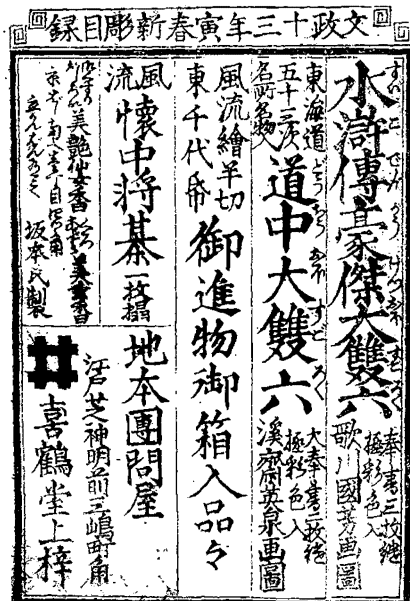
【張飛】と呼ばれ侍り。豕あぶらこなどを切り売りして、居酒屋なりばしを生業とする、賤しき身ではあなれども、少しく田畑も持ちたる故、さのみ貧苦といふにもあらねば、常々その名の聞えある、女子を友とし交はりて、そを樂しみとするものから、只今こゝを過ぎる折節、御身高札たかのものとたゞすみて、ほとく嘆息し給ふは、故こそあらめ聞かまほし」と、言ふに玄妙答へて言ふやう、「妾も今は落ちぶれて、見る影もなき身なれども、遠とほつ親は禁庭に、

三の巻へ

(10ウ)

《第一冊 後表紙封面》

※国会図書館蔵本による



▼「文政十三年寅春新彫目録」。冒頭の「水滸伝豪傑大双六」は、喜鶴堂と鶴屋喜右衛門・加賀屋吉右衛門・西村屋与八が刊記に名を連ねる「水滸伝豪傑双六」のことであろう。

《第二冊 表紙》



傾城三國志初編 けいせいさんごくししよへん 喜鶴堂梓
 庚寅新刊 文徳 ▼ 駒絵内。中央は文徳
 雪麿作 国貞画 上帙卷之下

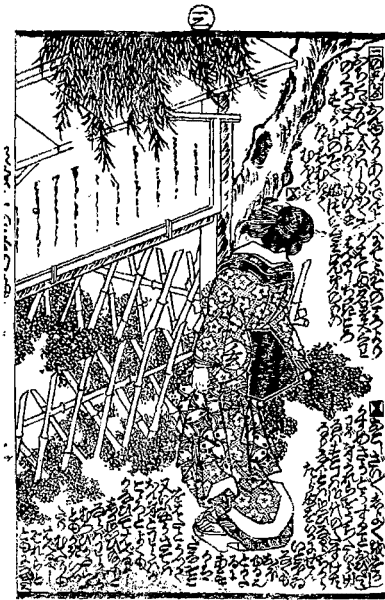
《第二冊 前表紙見返し》



雪麿作 文政寅春 〔初輯八冊〕
 傾城三國志
 国貞画 喜鶴堂梓 〔上帙下巻〕

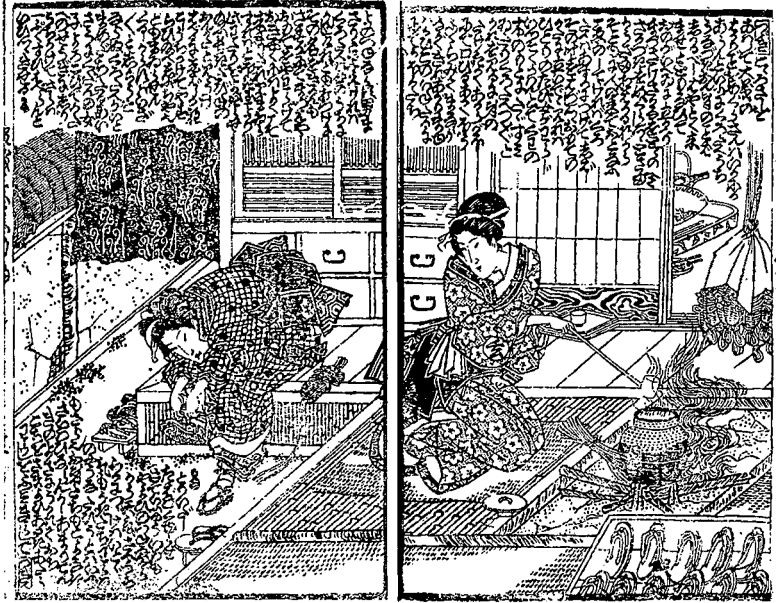
(三)

〔二の巻より〕おん由縁ゆかりある殿上人にて、父祖の頃より落ち下りて、今はしもかくなり果てぬ。名を大桑の玄妙くろたへと、呼ばるゝ者にて侍るかし。近き頃鈴鹿山の、賊婦芒角つものくろ兄弟の者、道に背きて謀反を■／＼起こし、在々所々を侵しかすめ、騒動すること夥し。我が身彼らを討ち平らげなば、少しは御代の助け共、なりなんとと思ひながら、力足らぬをいかにせん。いと本意ほんゐなくもおぼゆる也」と、



(11オ 高礼を眺める玄妙)

語るに飛鳥は掌たなせこを、はたと打つて又言ふやう、「さては御身と妾が心と、よくもかなひて侍るかし。しか思ひ給ふとならば、妾が睦むつび語らふ友がき、五人六人も侍るべし。それらと共に次へ(11オ)／＼続き志を、合はして大義のはかりごとを、めぐらさんはいかにかあらん」と、言ふに玄妙うち領き、「御身の言葉しかるべし。はやとく来ませ」と伴ひて、おのが家居いへに立帰り、まづ酒肴さかなを調べて、盃を巡らしつゝ、とさまかうさま相はかる、折せから外面そとに人の来て、訪おとふ声のしてければ、玄妙くろたへは飛鳥に告げて、しばしその坐を外しつゝ、表の方に立出で、見ればひとり旅女が、草鞋一足買はんとて、桑の木のもとにたゞすみゐたり。玄妙つく／＼と彼を見るに、身の丈高く赤ら顔にて、口びる赤く頬ほくらみて、まなじり長く切れ上がり、眉は蚕いぬの寝たるに似て、顔形かほかたち世の常ならず、男勝りと見えければ、玄妙は心の内に、感じけれども打つけに、その名を聞かんもさすがにて、まづはおもてや面おもを和らげて、「お客にはよくこそ来ましたれ。見参まゐらすれば遠き国より、此わたりを過ぎらせ給ふ、長き旅



(11ウ・12オ 閑路、草鞋を求める)

寝の御方と、見受け侍るにしばしが程、腰うち掛けて休
 らひ給へ。洪茶也とも参らせん。苦しからずはいざ
 く」と、素人ならぬ玄妙が、いとまめだちたる愛想に、
 件の女子喜びて、かたへの床几に尻うち掛けて、「さら
 ば一服吸ひ侍らん」と、言ひつゝ、煙管〇〇取り出だし、
 煙草くゆらせせて言ふやう、「いつも弥生の常ながら、
 かう天気さへ麗らかに、続けばいとゞ氣も浮き立ち、妾
 のやうな旅人は、言ふもさらもお身たちも、こよなき幸
 ひならんかし。余り天気よさに浮かれて、遠近をさま
 よひ歩き、あたら草鞋を踏み切らして、次へ(11ウ・12
 オ)／＼続きやくなきことよ」と言ひながら、吊せし草鞋
 を一足取りて、しごしらへするかたへより、玄妙がまた
 言ふやう、「弥生といへどまだ寒くて、何とやら時候の
 悪さに、近くは時の氣の病さへ、世上にいたく流行して、
 死する者もありと聞ぬ。お客にはそれらの障りもなく、
 ましますは喜びならぬ。そが上に又此頃は、近きわたり
 に強盗起こりて、あなたこなたの村々を、侵しかすめて
 穏やかならぬ、噂のみ聞こえ侍るに、御身も旅の道すが

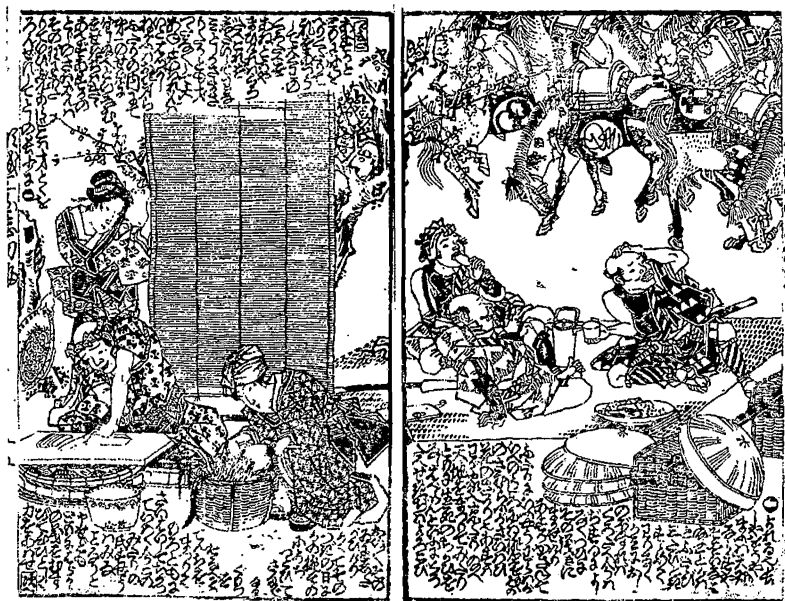
ら、そこらの用心し給へ」と、言ふに件の女答へて、「さればとよ此程は、とにかく世の中騒がしきに、女子の身に一人旅は、いとすゞるにも覺束なく、思ひ給ふは無理ならねど、妾は幼き頃よりして、女子に似気なき武芸の道を、少しく心がけたれば、しやつらの如き盗人の、十人や廿人は、物の数とも思はねど、かの鈴鹿山の芒角らは、数百人の党を結びて、徘徊するよし聞ぬるが、いかで妾に力を添ゆる、人しもあらばしやつらを、微塵になさんと思へども、力足らぬをいかにせん」と、息つきつゝ物語れば、玄妙は秘かに喜び、「まことやこれも我が身の為に、一臂の助けとなる者也。これをも友に語らひ入れん」と、思案をしつゝ又言ふやう、「最前より御身が名を、問ひたくは思ひ侍れど、ついで悪さに黙し侍り。御身が今の言葉につきて、妾が上も打ち明けし、上にて秘かに語るべき、訳もあなればうち解けて、まづ名を名乗りて聞せ給へ。こと訝しく思はれんが、話の内におのづから、疑ひは解け侍らん」と、勧むる言葉に彼の女は、一議に及ばずほう笑みて、「数ならぬ身の名

を告げんも、をこがましうは侍れども、妾はもと河内の国、丹南郡、たぢみの南の者にして、名をば関路【関羽】と呼ばれ侍りぬ。先つ年我が住む里の、剛勇なる者どもらが、おのが勢ひあるに任して、妾をいたく侮りつゝ、しばし辱められて憤りに、堪へざりければこれらを殺して、妾はそれより近江路なる、琵琶湖のほとりに身を逃れ、五年六年流浪して、此度此わたりへさまよひ来たりぬ。しかるに今黄巾の賊婦、蜂の如くに起りければ、国々の守護地頭より、令を下して兵を、招くよしの聞えしかば、いかで我にも助けあらば、朝家のおん為に身を粉に砕き、いささか朝恩に報せんとの、真心にて侍るか」と、告ぐれば玄妙いよく喜び、「よくこそ思ひ起こし給ひぬ。わなみが心も御身と等しく、とくよりしか思ひ侍れど、助けなきを如何にせん。しかるに最前図らずも、御身と妾が志に、等しき夫人に出会ひ侍りぬ。その訳はかやうと、その女子の名はしかく」と、飛鳥がことをも詳らかに、告げて他事なくもてなせば、関路は喜びに堪へずして、「真に天の助けぞ



(12ウ・13オ 同居する三姉妹)

かし。さらばわなみもその人に、見えて共に▲▲／▲▲心の底を、打明かして刎頸の、交ほりを結びなん」と、言ふに任して玄妙は、関路を伴ひ飛鳥がある、坐敷に至りて詳らかに、事のやうを説き聞かすれば、飛鳥も共に喜びて、関路と初対面の一礼終はり、また盃を巡らす程に、飛鳥は容を正して言ふやう、「かく三人まで志の、同じ友どち集へるからは、近きに義兵を起こすべし。それにつき友どちの、義に背かざるしには、**次へ**(12ウ・13オ)／**続き**三人ともに兄弟の、縁を結ばゞいかにあらん。玄妙の刀自は三人の内にて、ことに年長けて見え給へば、一の姉となり給へ。関路御寮はわなみより、年かさ少し勝り給はん。さすればその次となり給へ。わなみ最も年なほ若し、末のいもとゝなり侍らん。いざとくく」と勧めければ、関路もつともと同心して、**次へ**(13ウ・14オ)／**続き**飛鳥と共に坐をへりくだりて、礼を厚うして大桑の、玄妙を姉と敬ひければ、玄妙これを辞退して、「わなみ年かさ勝りたりとも、才拙くして大姉と、いはれんはいと恥づかし。願ふは御身ら二人の内



（13ウ・14オ）桃園の宴

にて、第一の席に坐し給へ」と、辞むを閑路は聞あへず、
 「飛鳥の刀目の裁判は、その理に当たりて言ひ分あらじ。
 こは才徳を論ぜずして、年の長少に●／＼よれる也。長
 者を敬ふは天理ならずや。そを辞み給ふことかは」と、
 二度三度説き勧めて、わりなく上におし上すれば、玄妙
 今は辞するに由なく、つひにその議に任せけり。

飛鳥重ねて二人に言ふやう、「妾が家の後には、桃園
 の候ふが、幸ひ花の盛り也。明日は我が家へ来たり給へ、
 天地を祀りて三人共に、生死の誓ひをなし侍らん」と、
 言ふに玄妙・閑路は喜び、各々その意に従ひけり。

かくてその次の日に、かの桃園にうち集ひて、様々な
 る供物を供へて、天地を祀りてもる共に、再拜して誓つ
 ていはく、「今この三人の氏素性は、みな異なりと申せ
 ども、ともに姉妹の義を結びて、心等しく力を合はせ、
 次へ（14ウ・15オ）／＼続き上は国恩を報じ、下は万民を
 救ひなん。望むらくは同年同月同日に、死する事こそ願
 はしけれ。皇天后土我々が、此心を照覧まし／＼、もし
 義に背き恩を忘れば、天人ともに誅戮すべし。あなかし

(14ウ・15ウ 世平ら、馬を曳き至る)



こあなかしこ」と、祀り終はりて玄妙が、母を三人の母とし崇め、さて同じ里の内にも、器量すぐれし女ばらは、みな来たり集まりて、三百余人に及びければ、彼らをも桃園に、集へて酒を飲ましめつゝ、明日より旗を挙げんとするに、飼ひ馬一匹もあらざれば、いかにせんともろ共に、案じ〇／＼わづらふその折から、「誰とは知らねど数多の人々、多くの馬を引かせつゝ、此所へ向かひ来たる」と、告ぐるものゝありければ、玄妙は小躍りして、「これ天の我が輩を、助け給ふ所也」とて、外面に立出で眺むるはしに、はや間近くぞ来りける。玄妙は此人々を、桃園に迎ひ入れて、「今日なんこゝにて花見の宴を、催す折から幸ひ也」と、酒肴を改めて、飛鳥・関路ともろ共に、数多の人に勧めければ、人々喜ぶこと大方ならず、**四の巻へ** (15ウ)



(15ウ・16オ 得物を手にする三姉妹)

(四)

続き中にも頭だちたる男が、坐を進みて言ふやう、「我々二人は尾張の国の、商人にて候ひぬ。一人は名張屋世平【張世平】と呼ばれ、今ひとり、蘇双屋候兵衛【蘇双】と呼ばれる者なり。年ごとに都へ至りて、馬を商ひ候が、こたび又都へ上らんとて、当国鈴鹿山の麓を過ぎるに、黄巾の賊婦らが為に、道を遮り止められ、往来悩ましかるにより、空しく故郷に、帰る折からゆくりなく、此もてなしに会ふことの、喜ばしさよ」と物語れば、玄妙又彼らに向かひ、「我々姉妹三人にて、件の賊婦らを討ち平らげ、民の悩みを救はんと、欲するのほか他事なし」と、つぶさに由を告げにければ、世平・候兵衛もろ共に、◇／◇その志を感じるの余り、駿馬五十四匹、金銀五百両、鉄一千斤を贈りつゝ、別れを告げて帰りけり。玄妙らはこれらを受け得て、望むところの品々なれば、馬は軍馬に是をあて、又金銀は軍用金とし、鉄をばよき鍛冶をあつらへ、二振りの剣を打たせつゝ、玄妙これを○／○差し料とし、関路は力もすぐれたれば、大難刀を

打たしめて、これを青龍丸【冷艶鋸(青龍偃月刀)】と名付け、飛鳥も又いと長き、▽/▽/△矛を作りて、おのゝものずきを尽しつゝ、鎧兜も等しく調べ、兵具ことごとく備はりければ、「いざや時を移さずして、うち発つこそよからめ」とて、その勢都合三百余人、長野をさして至りける。所の守護、△/△長野の庄司【劉焉】は、しきりにこれを喜びて、まづ玄妙が姓名を問ふに、玄妙が先祖は、禁庭に由縁ある、殿上人にてありける由を、詳しく語り聞かせしに、庄司これより甚だ敬ひ、親しむ事親族の如し。

こゝに又、黄巾の賊婦の内に、大方遠近【程遠志】といへる者、五百人に次へ(16才)／＼続き余りたる、賊徒らを従へて、村々里々を脅かし、かすむる事火の如くなれば、長野庄司は怖へかね、家来武東太が、娘蒲生【鄒靖】といふ者を、一軍の大將となし、玄妙を先駆けとして、大方遠近を討たしむるに、すでにその勢三百余人、岩根山の麓まで押し寄せければ、賊の方にも又百余人、備へをなして控へたり。

かくて大桑の玄妙は、太く遅しき馬にうち乗り、関路・飛鳥を右左に、従はしめて場中に出で、大音あげて言ひけるは、「やよ汝、天に背ける賊婦ども、敵はぬ腕立てせんよりは、何とて早く降参せざる」と、呼ばはる声を聞くよりも、賊軍の副将刈藻【鄧茂】といふ者、一言のいらへも〇/〇なさて、馬を飛ばして討つてかゝるを、それと見るより左りに備へし、飛鳥は眼をいからして、髪の毛逆さまに立のぼり、長やかなる〇/〇矛をうち振り、件の刈藻をとり止め、只一合に、馬より下へ突き落とし、首切り取つてしづくと、もとの陣所へ帰りたる、その為体を見るよりも、賊の大將遠近は、たちまち怒り心頭に発し、無二無三に切つてかゝれば、「さしつたり」と右の方より、出でて関路がせき止むる、青龍丸と名付けたる、大雑刀の柵に、さゝえられつゝ遠近は、大きに恐れて遠方を、さして落ちんとする所を、関路はすかさず一なぎに、首打ち落とす手練の切つ先、心地よくこそ見えにけれ。

さる程に賊軍には、大將討たれて何かせんと、皆々降



（16ウ・17オ 教景の飛脚到来する）

参したりしかば、玄妙は討ち取る首を、道の傍らかたはに斬り
 かけさせて、功をおさめて立帰る。かくと聞くより長野
 庄司は、喜び勇み出迎へて、玄妙・閑路・飛鳥はさらへ也、
 諸軍勢に至るまで、厚く恩賞を与へつゝ、その夜酒宴を
 催して、各々をもてなす折から、近江国伊香の太守、郡
 司教景のりか【龔景】の、早飛脚到来して、黄巾の賊、我が村
 邑を侵おかすめ、乱暴狼籍大方ならず。次へ（16ウ・
 17オ）／続き早く加勢を頼むの由、急を告げこしたりけ
 れば、庄司大きに驚き呆れ、玄妙に対面して、こと詳つまびら
 かに説き示し、「いかにすべき」と他事もなく、問へば
 玄妙答ふるやう、「身不肖みせうなれども妾らが、◆／◆義兵
 を起こして賊徒らを、平らげんと心の心がけは、我が身の
 ためにするにはあらず、天下の民を救はんとてなり。さ
 るから他国の事なりとて、よそに見なさんやうやはある。
 願ふは我が身かしこに行き、教景ぬしを救ひなん」と、
 言ふに庄司はうち喜び、すなはち蒲生をさし添へて、江
 州を救はせける。

玄妙は先手くろたゑに進み、すでに江州に赴きければ、賊軍近



(17ウ・18オ 玄妙、賊徒を退ける)

く押し寄せ【▼合印の「●」脱】／●つゝ、その為体を
 ○／○うかゞひ見るに、賊婦らは皆ことごとく、頭の髪
 を振り乱し、黄なる絹にて額を包み、八卦の紋を書き記
 し、これを目印とするにやあらん、みな等しくいでたち
 たり。玄妙が救ひの為に、来たれるさまを見たりければ、
 右と左にひき分かれ、防ぐ事さも嚴重なり。玄妙も手の
 者どもに、下知を伝へて入れ乱れ、力を尽くして戦へど
 も、賊徒が勢は目上【▼「に」の誤】余る、大勢にてあ
 りければ、新手の者【次へ】(17ウ・18オ)／【続き】を入れ替
 へ〜、防ぐものから玄妙は、戦いあぐんで已むことを
 得ず、あはい遙かにひき退き、さて関路・飛鳥と、事を
 はかりて言へるやう、「今味方には兵 少なく、このまゝ
 攻めば勝つことあたはず。明日は奇兵を出だしつゝ、
 □／□賊が囲みを破りなん。その手立てはかう〜」と、
 三人ともにはかりつゝ、関路には百ヨ人の、者どもを従
 へしめ、山の左にまいやく【▼「埋伏」カ】さし、飛鳥
 にもまた百ヨ人の、手勢を付けて右に伏せ置き、「鉦を合
 図にて、皆一時に起こるべし」と、約束かためて次の日



（18ウ・19才 教景、玄妙らを賞す）



に、玄妙・蒲生ひと手になり、△上へ△下より前面より押し寄するを、賊の大勢はかりごと、ありぬべしとは思ひも奇らず、あたかも潮の湧くごとく、競へかゝりて鬨の声、天地も振るうばかりなり。玄妙・蒲生はかりそめに、しばらく戦ふていに見せ、偽りて負けて引退くに、賊徒は得たりと勝つに乗つて、後より急に追ひ来たれば、玄妙はさもこそと、心に喜びいよいよはかりて、且戦ひ且走りて、思ふ場所まで追つかげさせ、よき潮合ひを見あはせて、一度に鉦を鳴らしにければ、左の方より閑路が勢、どつと喚いて斬つて出づれば、又右よりは飛鳥が手勢、双方等しく群がり起こり、左右に挟んで撃つてかゝる。時分はよしと玄妙も、とつて返して三方より、おつ取り囲んで攻めたつるに、賊徒ら奇兵に驚き慌て、うろたへ騒ぎておのがまに、四方八面へ逃げ散れば、玄妙得たりと勢ひに乗つて、息をもつがせず伊香なる、寨近くに追ひ至れば、大守教景門おし開かせ、まつしぐらに撃つて出づれば、賊婦ら前後に度を失ひ、あるひは討たれあるひは逃げ失せ、右往左往になりゆくものから、

(19ウ・20才 賊軍、火攻めにあう)



たちまち静謐したるにぞ、教景が喜び斜めならず、玄妙・関路、飛鳥・蒲生ら、その他もろくの女ばら、又雑兵らに至るまで、重く恩賞を与へつゝ、且厚くねぎらひて、しばらくこゝに□

▼以下有脱。脱落部分は、原作『通俗三国志』巻一における、以下の一節に相当する。

太守大に喜び、重く諸将を賞しければ、鄒靖軍を収めて、幽州に回らんとす。時に玄德申されけるは、

「近ごろ中郎将盧植、勅命を受けて、賊の首将張角と、

広宗にて戦ふと聞り。我昔し公孫瓚と共に、盧植を

師とせり。……

(九丁裏)

▲聞及びぬ。我が身は昔玉梓【公孫瓚】と、いへる者ともろ共に、盧橘【盧植】にももの学びして、親しき師弟のちなみあり。今我が身かしこに行きて、力を合はせて賊徒らを、平らげんと思ふ也」と、聞いて次へ

「すべて絵組みは、本文より先に出づ。その心得で読み給ふべし。

(18ウ・19才)

続き 蒲生は答へて言ふやう、「御身の言葉はさる事なが

ら、わなみは主の仰せを受けねば、軽々しくはゆきがたし。御身もし行き給はゞ、兵糧はわなみ方より、心のまゝにつき参らせん。とくく思ひ起こし給へ。残れる勢はことごとく、わなみ率いて帰るべし」と、言ふに玄妙はさらばとて、大守教景にいとまを告げ、蒲生には引分かれて、関路・飛鳥ともろ共に、はながきの庄に至り、絶えて久しき盧橋に、まみえてことのやうを語れば、盧橋は思ひがけなき、玄妙が手の者を、あまた引連れ来た



(20ウ) 梁・七宝姉妹

るを見て、喜び色に表はれて、懇ろにもてなしつゝ、しばらく手下に留め置きぬ。

此折から、賊徒の主將数千の勢にて、はながきの庄に屯し、盧橋が手の者と、日久しく戦へども、はかしくしき勝負もなく、空しく日ごろを経るまゝに、盧橋は玄妙を、近く招きて示すやう、「今賊徒らことごとく、要害の地に引籠もり、折々出でて戦へば、急に勝負はあるべからず。かの賊婦芒角が、妹梁・七宝と、呼ばるゝ者二人もろ共に、**次へ**（19ウ・20オ）／＼**続き**当国国見山にたて籠もり、大嵩【皇甫嵩】・朱根【朱雋】と攻め戦ふ。今御身に百余人の、勢を譲りて与ふべし。急ぎこれより国見山の、麓なる朱根らが、寨に行きて戦ひを、助け給はゞ彼らが為には、こよなき幸ひといひつべし。御身が心いかにぞや」と、言ふに玄妙一義に及ばず、「然らばすぐさま彼処にゆきて、御身が所存をつばらかに、かの**二方**に告げ知らし、わなみもその手に加るべし。まづ**牒状**を認め給へ、その状をもたらしゆきて、**二方**にまみゆべし」とて、それより玄妙は盧橋が、牒状を携へて、

国見山にぞ赴きける。五の巻へ

墨川亭雪麿作(印) 五渡亭国貞画(印)

浄書金川

世間に類なきおん顔の、葉白粉美艶仙女香、

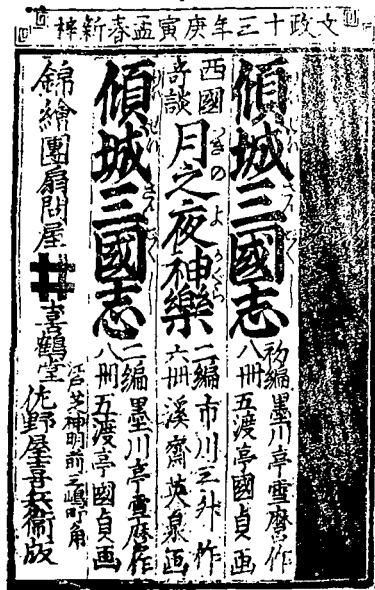
一包四十八分。

同じく黒油、白髪染め葉美玄香、一員四十八分。

江戸京橋南へ一丁目 東側角 坂本氏製 (20ウ)

《第二冊 後表紙封面》

※明大図書館蔵本による



▼「文政十三年庚寅孟春新梓」。ここに見える本作第

二編は、文政十四年(天保二年)に刊行された。

『月之夜神楽』の作者市川三升は、七代目団十郎の筆名で、実際は五柳亭徳升の代作。

(かんだ・まさゆき 法学部准教授)